第４回シンポジウム―4

歴史記述からみた「植民地的近代」

井坂理穂

今回のシンポジウムで報告者に与えられた課題は「植民地的近代とは何か―オリエンタリズム、ナショナリズム―」というものであったが、ここでは焦点を絞り、植民地期インドの知識人たちが残した歴史記述を検討しながら、彼らにとって「植民地的近代」がもっていた意味を考えてみたい。19世紀半ばごろから、インド各地の知識人たちは、インド史や地方史、カースト史など、多種多様な「自分たち」の歴史を書き、出版している。これらの記述には、植民地政府の統治理念や政策、西洋の思想・学問潮流、西洋におけるインド史、インド社会に関する研究などが影響を及ぼしている一方で、各々の書き手や書き手の属するコミュニティのおかれた社会・経済状況、彼らのアイデンティティのあり方、在地社会における既存の歴史認識などが、様々なかたちで反映されている。本報告では、19世紀後半に活躍したパールシー（インドのゾロアスター教徒）知識人の書いた歴史記述を事例として取り上げ、彼がそのなかで「自分たち」をどのように描き出しているのかを分析しながら、そこに浮かび上がる「植民地的近代」の特徴や、「オリエンタリズム」「ナショナリズム」との絡み合いを考察する[1]。

1　19世紀後半のインド知識人と歴史記述

19世紀半ばごろから、インド各地の知識人たちの間では、それまでの在地の歴史記述とは異なるかたちで、インドの歴史、ベンガル、グジャラートなどの地域の歴史、宗教コミュニティやカーストごとの歴史など、様々な「自分たち」の歴史が書かれ、出版されるようになる。この現象

の背景には、まず、植民地支配下で導入された学校教育や、西洋の文献（あるいはそれらの翻訳）を通じて、西洋の「歴史」の概念や記述形式が知識人の間で知られるようになったことが挙げられる[2]。また、西洋の学者やイギリス人植民地官僚によるインドの各地域・集団についての情報収集や分析も、彼らが出版した書物を通じて、在地の知識人の歴史観に影響を与えている[3]。西洋の学者や植民地官僚のなかには、インド人には自らの歴史や社会を秩序立てて理解する能力が欠如していると主張する者もおり、こうした認識が、ヨーロッパ人によるインド各地での考古学的調査や、史料の収集・保存・編纂・翻訳・出版の作業を促す場合もあった。しかしながら、このような調査や分析の過程には、ほとんどの場合、在地の知識人らが助手・協力者として参加しており、こうした作業を通じていわゆる「西洋」と在地社会の間の知的交流が起こり、歴史に関する異なる概念や記述形式に双方が接する機会が生じていた点も重要である[4]。

このような状況のなかで、インド知識人からは、「西洋」の歴史概念・記述形式に倣いながら、また、「西洋」によって提示された「自分たち」についての情報や分析を参照しながら、同時に、それらとは異なるかたちで、自分たち自身の手で自分たちの「正しい」歴史を書き表すべきであるとの主張が出されるようになる。彼らはしばしば、それまでに宮廷を中心に書かれていた王や王朝の歴史ではなく、言語・地域[5]・宗教・カーストなどにもとづく「自分たち」の歴史を書くとの意識を明確にしている。このように「自分たち」の歴史をまとめる試みは、植民地政府や官僚からの後押しや、インド人エリートたちが組織する社会改革団体、文芸協会、カースト協会などによって奨励され、広められることもあった。こうした知識人による歴史記述には、西洋の影響とともに、植民地期以前に在地社会に存在した歴史意識も様々に影響を及ぼしている[6]。また、これらの「自分たち」の歴史は、書き手や書き手の属するコミュニティのおかれた状況や、彼らのアイデンティティのあり方を反映しながら、多様な歴史像を生み出すことになり、それらはしばしば相互に影響を及ぼしあい、ときには競合・対立の様相をみせていた[7]。

以下では、こうした「自分たち」の歴史の一例として、「パールシー」としてのアイデンティティにもとづく「自分たち」の歴史を描いたドーサーバーイー・フラームジー・カラーカー（Dosabhai Framji Karaka,

1828-1902）の著作を取り上げる。なかでも彼が1884年に出版した『パールシーの歴史　その風俗、慣習、宗教、現状』（*History of the Parsis Including their Manners, Customs, Religion, and Present Position*）［Karaka 1884］を中心に分析する。

2　ドーサーバーイー・フラームジー・カラーカーの『パールシーの歴史』

ボンベイ管区の植民地官僚でありジャーナリストでもあったドーサーバーイー・フラームジー・カラーカーの『パールシーの歴史　その風俗、慣習、宗教、現状』は、1884年にロンドンで出版されており、同じ作者が1858年に出版した『パールシー　その歴史、風俗、慣習、宗教』（*Parsees: Their History, Manners, Customs and Religion*）［Dosabhoy 1858a］を土台としている[8]。84年版は58年版に比べて、この間に起こったできごとや、新たに発表された研究成果などを取り入れたために、１巻本から２巻本へと分量が増えているうえに、後述するように表現や強調点が異なっている部分が散見される。当時のインド西部在住の著名人たちを紹介している『インド西部のポートレート・ギャラリー』（*The Portrait Gallery of Western India*, 1886年）［Jalbhoy 1886］によれば、カラーカーはパールシーの「最初の歴史家」と呼びうる存在であり、『パールシーの歴史』はイギリス、インド双方の新聞雑誌で高く評価されていた。本書は英語で書かれ、イギリス人読者を強く意識した記述がみられると同時に、植民地支配下で変貌するインド社会のなかで、パールシー知識人がいかに「自分たち」を規定しようとしたのかについての試行錯誤のあとが表れている[9]。また、本書は同時代はもとより現在にいたるまで、パールシー知識人たちの間で頻繁に参照される文献となっており、後世のパールシーの歴史認識に与えた影響という点からも重要である。

作者のカラーカーは1828年にスーラトで生まれた[10]。ボンベイの名門エルフィンストン校（Elphinstone Institution）の出身であり、卒業後は植民地政府の官僚職につき、司法、徴税の分野で上位ポストにまで任命されているほか、ボンベイ市の市政の場でも活躍するなど、植民地期の典型的なエリートといえる人物であった。彼は母語のグジャラーティー語のほかに、英語、マラーティー語を習得しており、作家やジャーナリストとしても活躍している。1858年にはイギリスを訪問し、インド大反乱の影響でイギリス人が「インドの諸民族（Indian races）」に好意

を抱いていないと感じ、イギリスの政府や人々に「自分たち」の姿を「正しく」提示することを目的に、『パールシー　その歴史、風俗、慣習、宗教』をロンドンで出版する［Karaka 1884 Ⅰ：xxxi-xxxii］。さらに同年、同じくロンドンで、『イギリス統治とそれ以前の統治者たちとの比較』［Dosabhoy 1858b］を出版し、ムガル、マラーター支配と比較しつつ、イギリス支配がインドにもたらした利益を主張した。インド帰国後には、今度はグジャラートの人々にイギリスの状況を伝えるために、グジャラーティー語で『イギリス旅行記』（1858年）を出版している［Jalbhoy 1886］。『パールシーの歴史』は２巻からなり、第１巻には序章に続いて「歴史的描写」「ペルシアのゾロアスター教徒」「インドのゾロアスター教徒―彼らの風俗と慣習（この部分は２章に分けられている）」「内部の統治機構と法」「教育」の６章が、第２巻には「グジャラートのパールシー著名人」「ボンベイのパールシー著名人」「ゾロアスター」「パールシーの信条」「一神教と火の崇拝」「進歩と現在の地位」の６章がそれぞれ収められている[11]。カラーカーが58年版の『パールシー』を書いた目的、すなわち、イギリスの政府や人々に「自分たち」の姿を「正しく」示したいとの目的は、本書においても引き継がれており、彼は随所で、インド社会のなかでのパールシーの独自性、優越性や、パールシーの間でのイギリスへの忠誠心を強調している。カラーカーの歴史像の裏づけとなっているのは、J・マルコムの『最古から現代までのペルシア史』（*The History of Persia from the Most Early Period to the Present Time*, 1815）やM・ハウグの『パールシーの聖なる言語、著作、宗教について小論』（*Essays on the Sacred Language, Writings and Religion of the Parsees*, 1862）をはじめとする西洋の学者たちによる多数の歴史・宗教関連の研究書や、植民地政府のもとで編纂されたセンサス（国勢調査）・地誌など、いわば「西洋」を介して出された書物である[12]。しかし彼は同時に、パールシーに関する膨大な史料をまとめたB・B・パテール編の『パールシー・プラカーシュ（*Parsi Prakash,* パールシーの光）』[13]を重要な参考文献として序章のなかで言及したり、パールシーの結社や個人の援助のもとに、パールシー自身による研究・翻訳・出版が進展していることに着目するなど［Karaka 1884 Ⅱ：230-234］、パールシー自身によるパールシー研究にも大きな関心や期待を寄せている。彼は本書についても、パールシー自身によって書かれたパールシーの歴史書であるとの位置づけを強く意識しており

［Karaka 1884 Ⅰ : xxxii］、西洋の学者による記述をしばしば裏づけとして用いつつも、それらに自らの解釈を加えたり、ときには反論を展開しながら、パールシー自身が書く歴史記述のもつ正統性や重要性を主張している。このようにしてカラーカーは、「西洋」によって提示された「自分たち」を参照しながらも、それらとは異なるかたちで自らの伝えたいパールシー像を描き出そうと試みており、そこには彼自身を取り囲む環境や、同時代のパールシーのおかれていた社会的・経済的状況などが、様々なかたちで表れている。

3　『パールシーの歴史』にみられる歴史認識

次に、本書の内容を検討してみよう。カラーカーはまず序章でパールシーの通史を簡単に紹介しながら、パールシーが自らの宗教や伝統を守り、その「独自性（individuality）」を保ちながらも、常にインド社会に適応してきたことを論じている。続く第1章で、カラーカーは古代ペルシアの時代からパールシーがボンベイに集住するようになる17世紀ごろまでの時代を扱っている。カラーカーにとって、古代ペルシアの栄光は、その担い手の子孫であるパールシーの特異性、優越性の証にほかならなかった。彼はここで、現在のパールシーのなかに、祖先の「高貴な血」が「元来の純粋さ」を保ちながら流れていることを強調し、これに続けるかたちで、パールシーという名前が、彼らの「祖国」である「パールス（Pars）、あるいはファールス（Fars）」に由来することに言及している［Karaka 1884 Ⅰ : 11］。カラーカーの歴史認識では、古代ペルシアの栄光の時代は、イスラーム勢力がサーサーン朝を征服したことで終わりを告げ、この地は「ムハンマドにより呼び起こされた狂信的で野心的な精神」によって侵略されていく［Karaka 1884 Ⅰ : 11］。カラーカーはこの部分でムスリムについて、「宗教における寛容の精神」を知らない「傲慢で頑迷なコーランの信者」と表現するなど、厳しい評価を下している［Karaka 1884 Ⅰ : 22］。さらに第1章の後半部では、こうしたムスリムの「抑圧的で残虐な」手段によって、多数のゾロアスター教徒たちがイスラームに改宗を余儀なくされる中で、「良心に従い」、改宗せずに逃亡したゾロアスター教徒たちの歴史が描かれる［Karaka 1884 Ⅰ : 23-24］。ここでカラーカーは、1600年ごろにインド西部のパールシーの祭司が書き残したペルシア語の韻文作品「サンジャーンの物語」をもとに、ゾロア

スター教徒たちが、移動を繰り返した後にインド西部に定住した過程や、サンジャーンと名づけられた定住地における彼らの状況、さらにそれ以降の歴史を、詳細に記述している[14]。

この「サンジャーンの物語」は、19世紀前半にグジャラーティー語や英語の翻訳が出版されたことで広く知られるようになった作品である［Hodivala 1920: 93］。カラーカーはこの物語に沿って話を進めているのだが、ところどころに自らの解釈を付け加えている。たとえば、インド西部にたどり着いたゾロアスター教徒が、その地を治めるヒンドゥーの王から定住のための許可を得る場面では、祖国を追われた彼らが、この地で受け入れられるために、自らの慣習を変えてまで在地の状況に適応しようとしたことが、共感や同情をもって記述されている［Karaka 1884 Ⅰ: 30-35］[15]。またカラーカーは、パールシーが在地勢力にいかに忠実であったのかという点を強調しており、たとえば14世紀にイスラーム勢力がインド西部を支配下に入れた場面では、パールシーがヒンドゥーの王への忠誠を誓い、イスラーム勢力に対して勇敢に戦った様子を詳細に描いている［Karaka 1884 Ⅰ: 43-47］。インド西部がイスラーム勢力の支配下に入って以降の状況については、パールシーがムスリムの軍隊のもとで苦難を味わったことなどが触れられているものの、記述は少なく、この時代への関心の薄さを感じさせる。ただし注目したいのは、カラーカーが他の章で、ムガル朝の皇帝アクバルがゾロアスター教に強い関心を示していたことを好意的に描いたり［Karaka 1884 Ⅰ: xvi, Ⅱ: 3-4］、インドのムスリムはペルシアのムスリムほどはパールシーに憎悪を示すことがなかったと述べるなど［Karaka 1884 Ⅱ: 8］、インド史におけるムスリム支配を、彼の認識ではまさに「暴政」以外のなにものでもなかったペルシアのムスリム支配とは区別している点である［Karaka 1884 Ⅱ: 9］。カラーカーによれば、インドのパールシーは、「ムスリム（Mahomedan）の支配やムスリムの教えから予想されるような」不利益を蒙ることはあっても、「残虐で厳しい宗教的迫害」にあうことは「幸いにも」なかったのである［Karaka 1884 Ⅱ: 227］。こうした記述は58年版には含まれておらず、後述するように、ここにはパールシーがインドの他のコミュニティと友好的な関係を保持してきたことを強調しようとするカラーカーの意図が感じられる。

ムスリム支配下でのパールシーに関する記述とは対照的に、ヨーロッ

パ勢力のインド到来以降のパールシーの状況については、第3章以下で様々な側面から論じられている。カラーカーの認識では、ヨーロッパ勢力の進出によって、「パールシーが繁栄し重要性をもつ真の時代」が始まったのであった［Karaka 1884 Ⅱ: 9］。これ以降のパールシーを取り巻く変化については、衣食住における西洋化、女性を取り巻く環境の変化、パンチャーヤトの歴史、パールシーのための法律の制定、パールシーの間での教育の進展（特に英語教育、女子教育）、スーラトやボンベイでのパールシーの商業的な成功、パールシーの専門職への参入、慈善事業での名声、ゾロアスター教に関する研究の進展、「誤った」宗教的慣習の廃止などが、複数の章のなかで紹介されている。これらを通して描き出されるのは、植民地支配下でエリートとして活躍し、インド社会のなかで突出した地位にあるパールシーの姿である。さらにここで着目したいのは、カラーカーがゾロアスター教の教義や慣習について、近年の研究を踏まえながら、きわめて詳細な分析を行っている点である。とりわけドイツ人学者M・ハウグの議論を頻繁に引用しながら、ゾロアスター教が西洋の基準に照らしても合理的で優れたものであることを説いている。たとえば、彼はゾロアスター教に関する「誤った」理解を指摘しながら、ゾロアスターは二元論を説いていたのではなく、その主たる教えは一神教であると主張し［Karaka 1884 Ⅱ: 183-190］、パールシーは火そのものを崇拝しているのではなく、神の象徴としての火に敬意を表していることを強調する［Karaka 1884 Ⅱ: 207-225］。こうした部分には、パールシーの歴史をパールシー自身によって「正しく」提示し、それによってパールシーに対する評価を高めたいとする彼の姿勢をみることができる。

4　1858年版と1884年版の相違

次に、この『パールシーの歴史』と、そのもととなった58年版の『パールシー』の違いに注目し、この違いを植民地インドでパールシーがおかれていた状況の変化と関連づけながら考察したい。両者の間で内容が対応している箇所を比べてみると、ヒンドゥーなどインドのパールシー以外のコミュニティについての描写や、パールシーと彼らとの関係の描き方に、ところどころ差異がみられる。たとえば、58年版には「のろわれた『カースト』制度」という言葉［Dosabhoy 1858a: 222］や、パール

シー以外の人々は「無知につかり」「停滞したまま」「芯が腐っている無力な状態に陥っている」［Dosabhoy 1858a: 285］などの記述がみられるが、84年版ではこれらの表現はみられない。また、ヨーロッパ勢力の到来以前の時代について、58年版ではパールシーは「インドの在地の支配者のもとでみじめで貧しい状態におかれていた」［Dosabhoy 1858a: 222］と書かれているのに対し、後者では同じ箇所が、「自らの物質的な豊かさを拡大する機会に恵まれなかった」［Karaka 1884 Ⅱ: 273］という和らげた表現に置き換えられている。これに関連して、84年版では、パールシーがインドの他のコミュニティと友好な関係を築いてきたことが強調されている点も重要である。たとえば序章では、パールシーが千年以上もの間、ヒンドゥー、ムスリム、クリスチャンといった「異なる信仰や性格をもつ政府の支配下」にありながら、ヨーロッパにおけるユダヤ人の場合とは異なり、迫害を受けることなく、隣人たちと平和に共存してきたことが主張されており［Karaka 1884 Ⅰ: xviii］、他の章でも、彼らがインドの他のコミュニティの宗教や慣習を尊重し、「残虐で厳しい宗教的迫害」を受けることがなかった点が指摘されている［Karaka 1884 Ⅱ: 227］。さらにカラーカーは、パールシーがどのような政府のもとであっても、常に支配者に対する忠誠心で知られていたとも述べている［Karaka 1884 Ⅱ: 273］。

58年版における他のコミュニティへの批判的な評価は、パールシーのインド社会における優越性をどのように主張するかという点とも呼応している。58年版では、パールシーは「東洋のサクソン人」であるとされ［Dosabhoy 1858a: 163］、インドの諸民族のなかではヨーロッパ人に最も近く、「ある意味ではヨーロッパ人自身になろうとしている民族」［Dosabhoy 1858a: 286］であると述べられている。パールシーはインドの他の人々にとっての模範とみなされ［Dosabhoy 1858a: 282］、イギリス人と在地の人々との架け橋であるとされ［Dosabhoy 1858a: x, 282］、「東洋の無知」による制約から日に日に解放され［Dosabhoy 1858a: 284］、「文明の尺度」の上で上昇を続ける人々として描かれている［Dosabhoy 1858a: 286］。こうした歴史観にもとづいてパールシーの優越性を説く見解も、84年版では影をひそめている。インドの他のコミュニティに対する優越性は依然として言及されているのだが、イギリスを目標として、インドの諸民族が、パールシーを先頭として目標に向かって進化するとい

う構図は、58年版ほど明確ではない。逆に84年版では、「民族（nation）[16]としては彼ら（パールシー：筆者注）はまったく力をもっていなかった」［Karaka 1884 Ⅱ：227］と述べたり、パールシーはインドにおいては「大海の中の一滴にすぎない」［Karaka 1884 Ⅰ：xxii］と指摘するなど、「インド」という枠組みのなかでの「少数派」としてのパールシーの位置づけをより強く意識しているように思われる。「少数派」としての意識は、すなわち、「インド」の枠組みのなかで圧倒的「多数派」を占めるコミュニティとの関係をどのように築くのか、また、インド社会のなかで「外部者」ともみなされかねないパールシーを、どのように位置づければよいのか、といった問いともつながっていたと思われる。

こうしたカラーカーの記述の変化の背景としては、大反乱以降の植民地統治機構の発展と、そこで示された理念や政策を考慮する必要があるだろう。大反乱以降、イギリスがイギリスとインドの根源的な差異を強調し、インドの宗教・慣習への不介入の姿勢を強め、インドの「伝統」を引き継ぐ正統な統治者として自らを位置づけるようになったことは［Metcalf 1994, Metcalf and Metcalf 2002］、58年版にみられたような、インドの諸民族がともにヨーロッパ人化していくという歴史観に変更をせまるものであった。また、名実ともにインドの支配者となった植民地政府のもとで、センサスに代表されるように、言語・宗教・カーストなどにもとづき人々が分類され、それぞれの人口が数え上げられ、コミュニティとしての特徴が論じられ、統計・分析結果が様々なかたちで公表されたことにも留意する必要がある。このことは、インド知識人たちの間に、コミュニティへの帰属意識、コミュニティ間の境界・差異、さらには各コミュニティの規模・位置づけについての意識を高めたと思われる。現にカラーカー自身も本書のなかで、センサスの統計を参照しながら、パールシーのインド社会における位置づけを論じている［Karaka 1884 Ⅰ：91-99］。

また、こうした植民地政府による各コミュニティの把握は、インドの宗教・慣習の尊重という統治理念と呼応しながら、具体的な政策や制度をつくるにあたって、「コミュニティ」の存在を重視し、これを反映させるという植民地支配のあり方を、東インド会社のとき以上に強化することになる。在地社会の側でも、植民地政府の提示するコミュニティについての規定やそれにもとづく政策に対して、これらを利用し、自らの解

釈を加え、ときには批判し、変更を迫るなどのかたちで、コミュニティを再規定、再構築する過程に主体的に関わっている[17]。さらに、こうしたコミュニティの再構築過程は、自らのコミュニティを他のコミュニティとの比較や関係のなかでとらえる傾向をも促していった。たとえばパールシー知識人についてみれば、『パールシーの歴史』が書かれた前後の時代には、カラーカー以外の人々の間からも、パールシーが「少数派」であることを強調する見解や、インド社会におけるパールシーの優位性が以前に比べて低下しているとの危機意識、パールシーとインドとの歴史的な関係の深さを主張する議論などが活発に表されている[18]。

植民地期における言語・宗教・カーストなどにもとづくコミュニティの再構築過程や、コミュニティの存在を重視する統治のあり方は、植民地政府やインド人エリートが理解するところの「西洋近代」――そこでは「個人」の権利が主張され、少なくとも理念上は尊重・擁護されると考えられていた――の辿った道筋からは大きく離れていた。このことは、それを肯定的にとらえるにせよ否定的にとらえるにせよ、政府やエリートたちの間でも、広く認識されていたと思われる。やがて、インド人エリートたちが「インド」という国民国家の創設に向けて理念や制度を形づくっていく際にも、植民地期に新たな重要性を与えられ、再編されつづけた各種コミュニティの存在は、大きな影響を及ぼすことになる。すなわち、こうした理念・制度づくりに携わったエリートたちの間では、言語・文化的均質性をもつ「個人」の集まりを前提とする「西洋近代」の国民国家モデルを目指すのではなく、多様で多層的なコミュニティやアイデンティティの存在を認め、それらの存在を前提とする考え方が広く表されていた。彼らはこの前提を「個人」の自由や平等の理念と折り合わせながら、多様なアイデンティティに積極的な位置づけをも与えるような国民国家の創設を模索するのである[19]。

このほかに、84年版が書かれた当時の背景として、大反乱以降の教育・統治機構の発展や、パールシーを含む在地エリートの植民地行政への参入が、彼らを中心とした各地の社会・政治運動（当初は主に請願を目的としたもの）を引き起こしていた点にも留意したい。これらの運動はまもなく、「インド」を単位とした社会・政治運動へと発展していく。インド国民会議（Indian National Congress）が発足したのは、カラーカーの『パールシーの歴史』が出版された翌年のことであったが、「イ

ンド」を単位としたエリート層のつながりや運動の高まりは、本書執筆当時のカラーカーの周囲でも十分に感じ取れるものになっていたと思われる。こうした状況のなかで、カラーカーは、一方ではパールシーというコミュニティの独自性、優越性を主張しつつ、もう一方ではインドの「少数派」であるパールシーが歴史的に他のコミュニティと良好な関係を築いてきたことや、常に土地の支配者に忠実であったことなどを主張し、「インド」との関係の深さを強調した歴史像を描き出そうとしたのではないだろうか。

このようなカラーカーの歴史記述は、彼の親英的な態度にもかかわらず、ナショナリズムへの移行を可能とするような論理をそのなかに含んでいたともいえるだろう。インドへの忠誠心を忘れず、他のコミュニティと友好的に共存するパールシーという「自分たち」の表象は、独立運動の時代を経て、イギリスが去ったのちにも、継承されていくのであるが、これについては別稿で改めて論じたい。

註

1 本報告は、拙稿［井坂　2006］の一部をもとに、本報告の課題として与えられたオリエンタリズム、ナショナリズムの観点を採り入れながら発展させたものである。パールシーについては、［青木 2008a、青木　2008b、Boyce 2001、ボイス　1983、山本　1998、Godrej and Mistree 2002、Kulke 1978、Luhrmann 1996、Palsetia 2001］などを参照。

2 詳細については、[Deshpande 2007, Chatterjee 1993, Guha 1997, Isaka 2002] などを参照。

3 植民地期に「西洋」を通じて集められ、まとめられ、ときには翻訳された史料や、それらをもとにした研究成果は、いまだに歴史研究や学校教育の場はもとより、日常生活や娯楽の場（たとえば、大衆文学、映画、テレビなど）で語られる歴史認識にも多大な影響を残している。たとえば、現代インドの中間層の間で広く知られている歴史・神話漫画シリーズ『アマル・チトラ・カター（*Amar Chitra Katha*）』（不朽の絵物語）を分析した [McLain 2009, Chandra 2008] は、このシリーズの内容や表現に、植民地期に台頭した歴史観がどのような影響を与えているのかを明らかにしており、興味深い。

4 ヨーロッパ人の学者、行政官、宣教師らによる在地の社会・文化に関する情報の収集や分析のあり方については、たとえば [Bayly 1996, Cohn 1996, Dirks 2001, Dodson 2007, Metcalf 1994, Guha-Thakurta 2004] などを参照。オリエンタリズムに関する研究動向については、［井坂 2010］を参照。

5 言語にもとづくコミュニティへの帰属意識が一定の地理的領域と結びつけられ、地域アイデンティティとして表される場合も多い。詳細については、[Isaka 2006] などを参照。

6 植民地期以前にみられる歴史意識や歴史記述に関しては、[Deshpande 2007, Rao et al. 2001] などを参照。

7 これに関連して、本報告では十分に論じることができないのだが、植民地期の歴史記述を分析する際には、西洋の歴史概念や記述形式に精通した学者たちによる記述ばかりではなく、パンフレット、新聞、演説、祭り、小説、芝居、演劇、映画などの広範な場で語られる歴史像にも着目する必要がある。詳細については、[Deshpande 2007] を参照。

8 58 年版では作者名は Dosabhoy Framjee と記されており、Karaka の部分は含まれていない。当時のインド西部のエリート層は、自らの名前と父親の名前を並べるかたちで名前を記すことが多く、この場合も Framjee は父親の名前である。時代が下るにつれて、西洋の影響のもとに、「姓」に対応する部分が意識的に加えられるようになり、カラーカーの場合も 84 年版では名前の表記を Dosabhai Framji Karaka に改めている。名前のローマ字綴りも 58 年版、84 年版で異なっているが（Dosabhoy → Dosabhai, Framjee → Framji）、現地語の名前のローマ字綴りは、多くの場合、個人が自由に選択しており、このように同一人物の名前の綴り方が複数存在することも珍しくない。

9 植民地支配がパールシーの自己認識に与えた影響については、[Palsetia 2001, Luhrmann 1996, Kulke 1993] などを参照。これらの著作のなかでも、重要な事例として、カラーカーの著書が分析されている [Palsetia 2001: 28-29, Luhrmann 1996: 96-99]。

10 カラーカーの生涯については、[Jalbhoy 1886, Dobbin 1972: 43, 273] などを参照。

11 84 年版では、それぞれ 58 年版では 1 章分であった「風俗と慣習」「宗教」の部分が2章分に拡大されており、また、58 年版の「商業」の章にかえて、「グジャラートのパールシー著名人」「ボンベイのパールシー著名人」の2章が設けられている。58 年版の末尾の「結論」の章は、「進歩と現在の地位」の章にかえられている。

12 マルコムの著書や、これがイランにおける歴史叙述に与えた影響については、［守川 2010］を参照。

13 『パールシー・プラカーシュ』は、1878 年に第1巻が刊行され [Blumhardt 1908: 268]、20 世紀以降も刊行が続けられている。詳細については、[Boyce 2001: 183, ボイス　1983：259]、及び、Home Department, No. CXCV, *Reports on Publications Issued and Registered in the Several Provinces of British India during the Year 1882*, Calcutta: The Superintendent of Government Printing, p.23 を参照。

14 カラーカーは第2章で、ペルシアに残ったゾロアスター教徒たちの「現在」にいたるまでの状況についても論じている。

15 たとえば、カラーカーはここで、ゾロアスター教徒の祭司が、ヒンドゥーの王に彼らの宗教について説明する際に、牛への崇拝を特徴として挙げている点に関して、ヒンドゥーの王の好意を得るためであったとの説明を加えている。また、ヒンドゥーの王が彼らに定住の許可を与える際に出した条件、すなわち、在地の言語を使用すること、女性に在地の服装をさせること、武装しないこと、ヒンドゥーの慣行にあわせて夜に結婚式を行うことを彼らが受諾した点についても、同じような状況下ではどのような民族も同じ選択をしたであろう、との意見を述べている [Karaka 1884 I : 31-34]。

16 本書では、パールシーという集団を表す際に、race、nation、community など様々な言葉が用いられている。これらの言葉をカラーカーがどのように理解していたのか、また、意識的に使い分けていたのかどうかについては、今後の課題としたい。

17 植民地期において、言語・宗教・カーストなどにもとづくコミュニティが、植民地支配と在地社会との相互作用のなかで再構築された過程については、［藤井 2007、藤井 2003、Bayly 1999、Metcalf and Metcalf 2002、小谷 2003、小谷 1996］などを参照。パールシーについては、とりわけ [Palsetia 2001] が詳細に議論している。

18 たとえば、[Malabari 1889: 164-174, Kulke 1993: 167-169, Dobbin 1972: 217-224] などを参照。
19 インドにおけるナショナリズム、国民国家の理念の特質については、[Kaviraj 2002, Kaviraj 2010, Khilnani 1997] などを参照。詳細については、別稿を予定している。

参照文献

青木健、2008a、『ゾロアスター教史―古代アーリア・中世ペルシア・現代インド―』、刀水書房。
青木健、2008b、『ゾロアスター教』、講談社。
Bayly, C. A., 1996, *Empire and Information: Intelligence Gathering and Social Communication in India, 1780-1870*, Cambridge: Cambridge University Press.
Bayly, Susan, 1999, *Caste, Society and Politics in India from the Eighteenth Century to the Modern Age* (The New Cambridge History of India, Ⅳ. 3), Cambridge: Cambridge University Press.
Blumhardt, J. F., 1908, *Catalogue of the Library of the India Office, Vol. II-Part V, Marathi and Gujarati Books*, London.
Boyce, Mary, 2001, *Zoroastrians: Their Religious Beliefs and Practices*, London and New York: Routledge.
メアリー・ボイス、山本由美子（訳）、1983、『ゾロアスター教―三五〇〇年の歴史―』、筑摩書房。
Cohn, Bernard S., 1996, *Colonialism and its Forms of Knowledge: The British in India*, Princeton: Princeton University Press.
Chandra, Nandini, 2008, *The Classic Popular: Amar Chitra Katha, 1967-2007*, New Delhi: Yoda Press.
Chatterjee, Partha, 1993, *The Nation and its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*, Princeton: Princeton University Press.
Deshpande, Prachi, 2007, *Creative Pasts: Historical Memory and Identity in Western India, 1700-1960*, New York: Columbia University Press.
Dirks, Nicholas B., 2001, *Castes of Mind: Colonialism and the Making of Modern India*, Princeton: Princeton University Press.
Dobbin, Christine, 1972, *Urban Leadership in Western India: Politics and Communities in Bombay City 1840-1885*, London: Oxford University Press.
Dodson, Michael S., 2007, *Orientalism, Empire, and National Culture, India, 1770-1880*, Basingstoke: Palgrave Macmillan.
Dosabhoy Framjee, 1858a, *The Parsees: Their History, Manners, Customs and Religion*, London: Smith, Elder.
Dosabhoy Framjee, 1858b, *The British Raj Contrasted with its Predecessors and an Inquiry into the Disastrous Results of the Rebellion in the North-West Provinces upon the Hopes of the People of India*, London: Smith, Elder.
藤井毅、2007、『インド社会とカースト』（世界史リブレット 86）、山川出版社。
藤井毅、2003、『歴史のなかのカースト―近代インドの〈自画像〉―』、岩波書店。
Godrej, Pheroza J. and Firoza Punthakey Mistree (eds), 2002, *A Zoroastrian Tapestry: Art, Religion and Culture*, Ahmedabad: Mapin.

Guha, Ranajit, 1997, *Dominance without Hegemony: History and Power in Colonial India*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
Guha-Thakurta, Tapati, 2004, *Monuments, Objects, Histories: Institutions of Art in Colonial and Postcolonial India,* New York: Columbia University Press.
Hodivala, Shahpurshah Hormasji, 1920, *Studies in Parsi History*, Bombay.
井坂理穂、2010、「『オリエンタリズム』とインド社会」、奈良康明・下田正弘（編）『新アジア仏教史第2巻』、佼成出版社、56-59 頁。
井坂理穂、2006、「植民地期インドにおける歴史記述―パールシーの書く『自分たち』の歴史」、甚野尚志（編）『歴史をどう書くか』、講談社、178-199 頁。
Isaka, Riho, 2006, "Gujarati Elites and the Construction of a Regional Identity in the Late Nineteenth Century", in Crispin Bates (ed.), *Beyond Representation: Colonial and Postcolonial Constructions of Indian Identity*, New Delhi: Oxford University Press, pp.151-176.
Isaka, Riho, 2002, "Gujarati Intellectuals and History Writing in the Colonial Period", *Economic and Political Weekly*, 37-48, pp. 4867-4872.
Jalbhoy, R. H., 1886, "Hon'ble Mr. Dossabhai Framji Karaka, J. P., C. S. I.", in R. H. Jalbhoy(ed.), *The Portrait Gallery of Western India*, Bombay: Education Society's Press.
Karaka, Dosabhai Framji, 1884, *History of the Parsis Including their Manners, Customs, Religion, and Present Position*, 2vols, London: Macmillan.
小谷汪之（編）、2003、『現代南アジア5　社会・文化・ジェンダー』、東京大学出版会。
小谷汪之、1996、『不可触民とカースト制度の歴史』、明石書店。
Kulke, Eckehard, 1978, *The Parsees in India: A Minority as Agent of Social Change*, New Delhi: Vikas Publishing House.
Luhrmann, T. M., 1996, *The Good Parsi: The Fate of a Colonial Elite in a Postcolonial Society*, Delhi: Oxford University Press.
Malabari, Behramji M., 1889, *Gujarat and the Gujaratis: Pictures of Men and Manners Taken from Life*, 3rd edition, Bombay, Fort Printing Press.
McLain, Karline, 2009, *India's Immortal Comic Books: Gods, Kings, and Other Heroes*, Bloomington: Indiana University Press.
Metcalf, Barbara D. and Thomas R. Metcalf, 2002, *A Concise History of India,* Cambridge: Cambridge University Press.［邦訳　バーバラ・D・メトカーフ、トーマス・R・メトカーフ、河野肇（訳）、2006、『インドの歴史』、創土社］。
Metcalf, Thomas R., 1994, *Ideologies of the Raj* (The New Cambridge History of India, Ⅲ. 4), Cambridge: Cambridge University Press.
守川知子、2010、「『イラン史』の誕生」、『歴史学研究』、863、12-21 頁。
Palsetia, Jesse S., 2001, *The Parsis of India: Preservation of Identity in Bombay City*, Leiden: Brill.
Rao, Velcheru Narayana, David Shulman and Sanjay Subrahmanyam, 2001, *Textures of Time: Writing History in South India 1600-1800*, Delhi: Permanent Black.
山本由美子、1998、『マニ教とゾロアスター教』（世界史リブレット4）、山川出版社。

いさか りほ　●東京大学大学院総合文化研究科